

草津市立矢倉小学校通信 令和元年 8 月 26 日 NO.8



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

あどけなさ ……いつくしむ心のもとをたずねてみると

学校が夏休みに入ってしばらく経ったときのこと、いつもなら手をつけられずにいる書斎の片付け（大掃除！）をしていたときのことだ。妻がニコニコしながら、「おもしろいもの見つけた。こんなところにあった！！あゆかの小さいときのこと。」と、満面の笑みをたたえながら、小さなノートを見せてくれた。

あゆかからの電話

「あんな、あゆかな、すいた※にいるねん。

いま、こっちはよるやけど、そっちもよる？」 ※すいた：吹田市、祖父母の家

「あゆか」とは、姪っ子である。そのあゆかのことがかわいくて、しぐさや語ったことなど、ことあるごとに妻はメモをするようにしていた。そのノートが出て来たのだ。雑多な事物の中から、宝物を発見したような瞬間だった。

あのころ、あゆかにとっては、私たちの家で楽しいひとときを過ごすのはたいてい昼間だった…。だからなのだろうか。それにしても大人にはまねのできないあどけない問いである。

そんなあゆかも、今では中学3年生。受験を控え、人並みに進路に悩み、勉強に励んでいる。そこには、小さかった頃の無邪気な言動は見られなくなったものの、私たちにとっては、同年齢の他の多くの子どもたちとは異なる、格別な存在だ。

世の子どもたちはもちろん、大人も含め、すべての人にあつたに違いない幼い頃のあどけないエピソードは、そのエピソードを知る親しい人々によって、それこそ、宝物のようなかけがえない存在として受けとめられているものだ。夏休み中は、何かにつけて小言を言わずにいられたかった、そんな子どもであったとしても、大人たちは心のどこかで、あたたかく見守り、受けとめているにちがいない。親であればなおのこと、心のどこかで許し、幸せになってほしいと願いをかけている。もちろんそのまなざしは、日々のせわしなさにかき消されがちとなってしまうのだが…。

夏の終わりは、子どもたちにとって世の終わりのごとく受けとめられ、子どもの自殺率が高まるという。場合によってははじめ問題が背景に見え隠れもする。子どもたち、一人ひとりに伝えたいことがある。それは、「大切なあなただ」ということ、そしていつもずっと気にしている大人がちゃんといるということだ。さあ、2学期だ！

校長 大林 道範